

16. 赤潮防止対策事業 (毒化モニタリング)

赤潮防止対策事業（要旨） （毒化モニタリング）

漁場環境科

プランクトンが原因となって貝類が毒化する現象は、ホタテガイのみならず近年では西日本のヒオウギ、日本海のムラサキイガイさらには一部肉食性巻貝類にも認められるなど、その多様化、広域化が進んでいる。

この事業では水産庁の補助を受けて、浦ノ内湾産アサリの毒化監視と毒化関連プランクトン調査を行った。

1 調査の内容

平成元年4月から平成2年3月までの間、浦ノ内湾の1カ所でアサリを対象種、ヒオウギを指標種とし、麻ひ性貝毒及び下痢性貝毒を計8回、総数16検体検査した。また、同一地点で毒化関連プランクトンを主とするプランクトンの出現状況並びに環境（水温、塩分量）の調査を実施した。

2 調査結果の要約

平成元年2月以降7月までに行った調査結果の要約は下記のとおりであった。

- (1) 貝毒検査の結果、対象種であるアサリについては、麻ひ性貝毒、下痢性貝毒のいずれも検出されなかったが、指標種であるヒオウギでは両者が検出された。
- (2) ヒオウギの麻ひ性貝毒の最高値は65.3 Mu/g （中腸腺）で3月に検出された。また、下痢性貝毒は0.3 Mu/g （中腸腺）が3～6月に各1回検出された。
- (3) 毒化関連プランクトンの調査では、*Protogonyaulax* 属では *P. catenella* が3月から6月の間、水温12.5～23.1℃の範囲で出現した。その出現盛期は4月中旬～5月下旬で最高出現数は、2,340 cells/ ℓ であった。
- (4) *Dinophysis* 属では、*D. fortii*、*D. acuminata* ほか数種が僅かではあるが出現した。このうち、*D. fortii* は2～3月の低水温期に出現したが、最高出現数は30 cells/ ℓ にとどまった。